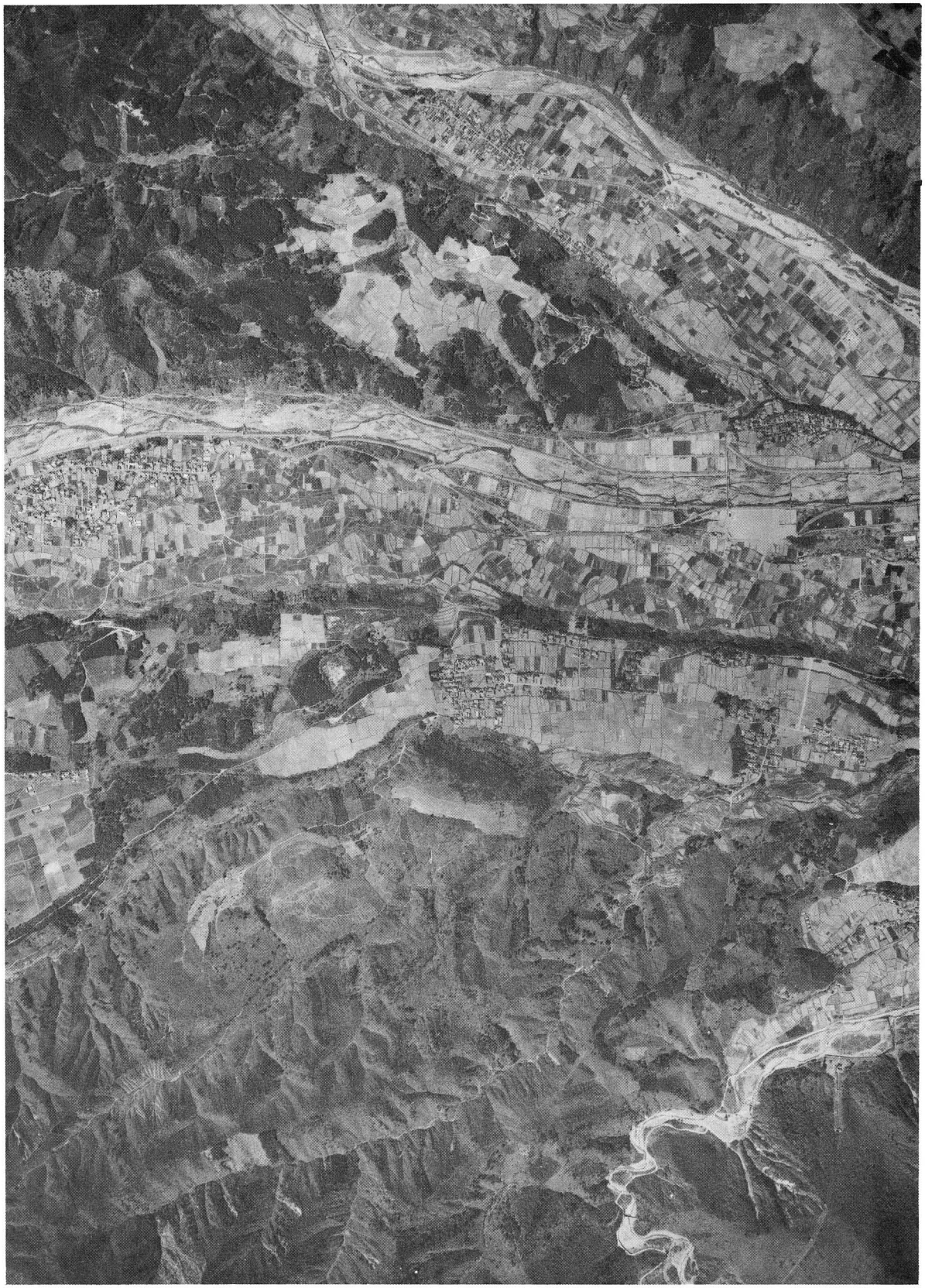
山梨県北巨摩郡武川村

遺跡詳細分布調査報告書

1989・3

武川村教育委員会



武川村全景写真（1971年４月27日撮影）

山梨県北巨摩郡武川村

遺跡詳細分布調査報告書

1989・3

武川村教育委員会

序　　文

武川村は、山梨県の北西部に位置し、昔、武河の庄といわれた中心で、大武川の扇状地に開けた村であります。昔、崇神天皇の御代、武停川別命（たけぬなかわわけのみこと）がこの地方を治められ、このため武川の名が生まれたといわれています。又、早くから官牧がおかれ、甲斐の駿馬の供給地として、真衣郷の名で開けた所とも伝えられています。

本村では、昭和60年７月末から、昭和61年にわたり緊急発掘調査が実施された宮間田遺跡から、縄文時代及び平安時代・鎌倉時代にかけての遺構や遺物が発掘され、先人の足跡を解明するためにも貴重な資料をうることができました。

本村教育委員会は、今回山梨県考古学協会の会員に依頼し、村内全域にわたる遺跡分布調査を、実施しましたところ、新たに69カ所の遺跡等が発見されました。村内の遺跡数は、今までに発見されている遺跡を入れて74カ所になりますが、今後整理の段階で増える可能性もあります。今後はこの調査結果を地域開発と文化財保護の両面に役立たせるためにも、意義ある資料となることを希望します。

今回の調査に協力いただきました村民の皆様、調査員の方々に心からお礼を申し上げます。

平成元年３月

武川村教育委員会

教育長　小　澤　一　雄

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡武川村の遺跡・埋蔵文化財の詳細分布調査報告書である。
2. 分布調査は、昭和63年度文化財保存事業として、武川村教育委員会が国・県の補助金を得て行った。
3. 写真撮影は、遺跡については各調査員が行い、表採遺物については宮沢公雄が行った。
   なお、表採遺物の観察・分類は櫛原功一が行った。
4. 本書の編集は、清水博・山下孝司・中山誠二・清水能行が行い、執筆分担は、次のとおりである。
   第１・２章清水能行　第３章河西学　第４章清水博・中山誠二　第５章山下孝司・保坂康夫　第６章の１平野修　第６章の２・３信藤祐仁・数野雅彦・畑大介　第７章清水博
5. 本書の作成にあたって、次の諸機関の方々の協力を賜った。記して感謝する次第である。
   （順不同、敬称略）
   山梨県立考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、武川村文化財審議会、武川村誌編纂室
6. 分布調査の記録、遺物は武川村教育委員会が保管している。

本　文　目　次

序　　文
例　　言
目　　次
第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２章　村　の　沿　革 …… 1
第３章　武川村の地形・地質 …… 3
第４章　遺跡の分布と概要 …… 4
第５章　表　採　遺　物 …… 10
第６章　村内の主要遺跡 …… 12
　1. 宮間田遺跡 …… 12
　2. 中　山　砦 …… 14
　3. 星山古城 …… 15
第７章　ま　と　め …… 16

参考文献 …… 16

挿　図　目　次

第１図　武川村全体図…… 2
第２図　武川村の地形区分 …… 3
第３図　実原Ｂ遺跡有舌尖頭器 …… 10
第４図　表採遺物 …… 11
第５図　宮間田遺跡遺構配置図 …… 13
第６図　中山砦測量図 …… 14
第７図　星山古城遺構概念図 …… 15
第８図　武川村遺跡分布図 …… 17・18

表　目　次

第１表　遺跡地名表 …… 7

図　版　目　次

図版１…… 1.　真原Ｂ遺跡（No.２）
2.　真原Ｇ遺跡（No.７）
3.　真原Ｈ遺跡（No.８）
図版２…… 1.　真原Ｉ遺跡（No.９）
2.　真原Ｊ遺跡（No.10）
3.　真原Ｌ遺跡（No.13）
図版３…… 1.　真原Ｍ遺跡（No.14）
2.　寺久保Ａ遺跡（No.17）
3.　寺久保Ｂ遺跡（No.18）
図版４…… 1.　神林遺跡　（No.19）
2.　西ノ宮Ｄ遺跡（No.23）
3.　実原Ａ遺跡　（No.25）
図版５…… 1.　山高Ｂ遺跡（No.29）
2.　東原Ａ遺跡（No.32）
3.　東原Ｂ遺跡（No.33）
図版６…… 1.　実原Ｂ遺跡（No.34）
2.　小路Ｂ遺跡（No.37）
3.　ママ下遺跡（No.43）
図版７…… 1.　牧原東原遺跡（No.44）
2.　堂仏寺遺跡（No.46）
3.　西原Ａ遺跡（No.47）
図版８…… 1.　下田中遺跡（No.50）
2.　山田Ｂ遺跡（No.54）
3.　坂下Ａ遺跡（No.56）
図版９…… 1.　尾崎遺跡　（No.65）
2.　御崎Ａ遺跡（No.66）
3.　御崎Ｂ遺跡（No.67）
図版10…… 1.　中山砦遠景（No.72）
2.　中山砦土塁上部（No.72）
3.　星山古城遠景（No.69）
図版11……真原Ｂ遺跡　縄文土器
真原Ｇ遺跡　打製石斧・石鏃
図版12……真原Ｃ遺跡　磨製石斧
真原Ｅ遺跡　打製石斧
寺久保遺跡　縄文土器
実原Ａ遺跡　縄文土器
打製石斧・磨製石斧
図版13……大小路遺跡　縄文土器・石器
実原Ｂ遺跡　縄文土器・石器
図版14……実原Ｂ遺跡　有舌尖頭器
打製石斧・磨石
実原Ａ遺跡　縄文土器
東原Ａ遺跡　常滑甕

第１章　調査に至る経緯と経過

武川村内における遺跡分布調査は、昭和37・46年度の２回にわたって行われ、その結果、縄文時代を中心に７ケ所が遺跡として登録されている。

一方、近年の経済活動の進展に伴い、開発行為等の件数も全国的に急増する傾向にある。武川村もその例にもれず、県営圃場整備事業（昭和54年度より実施）等の土地改良事業が継続中であり、その他に今後も大規模な地域開発、企業進出等が計画されているが、これらの行為に対して、適切な文化財保護を講ずるには、過去２回の分布調査の結果だけでは不十分であった。

そこで武川村教育委員会では、以上の状況をふまえ、過去の分布調査の結果を生かしながら、村内全域を対象とした埋蔵文化財に関する基本資料を作成するため、国・県の補助をうけて村内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

現地踏査は、11月上旬から12月下旬にかけ、武川村教育委員会の委嘱をうけた山梨県考古学協会々員の27名が実施した。まず武川村を１～24の区域に分け、一つの区域を１名で担当し、残る３名が村内の山城の調査にあたるという方法をとり、各調査員は遺物採集、現地の写真撮影、位置図の作成及び範囲の確認、カード化まで行った。また現地踏査終了後は、１月上旬から３月下旬にかけて、報告書刊行に向けての打ち合せ、遺物整理、記録作業等が行われた。

参加者　櫛原功一、桜井真貴、伊藤公明、河西学、保坂康夫、大森隆志、林部光、山下孝司、折井敦、中山誠二、中山千恵、堀ノ内泉、長沢宏昌、八巻与志夫、伊藤正幸、平野修、高野玄明、清水博、宮沢公雄、雨宮正樹、山路恭之助、斉藤修二、清水泰倫、佐野勝廣、畑大介、信藤祐仁、数野雅彦（以上、山梨県考古学協会）、深沢真知子、山寺保子、石原ひろみ、藤巻郁子、矢房静江

第２章　村　の　沿　革

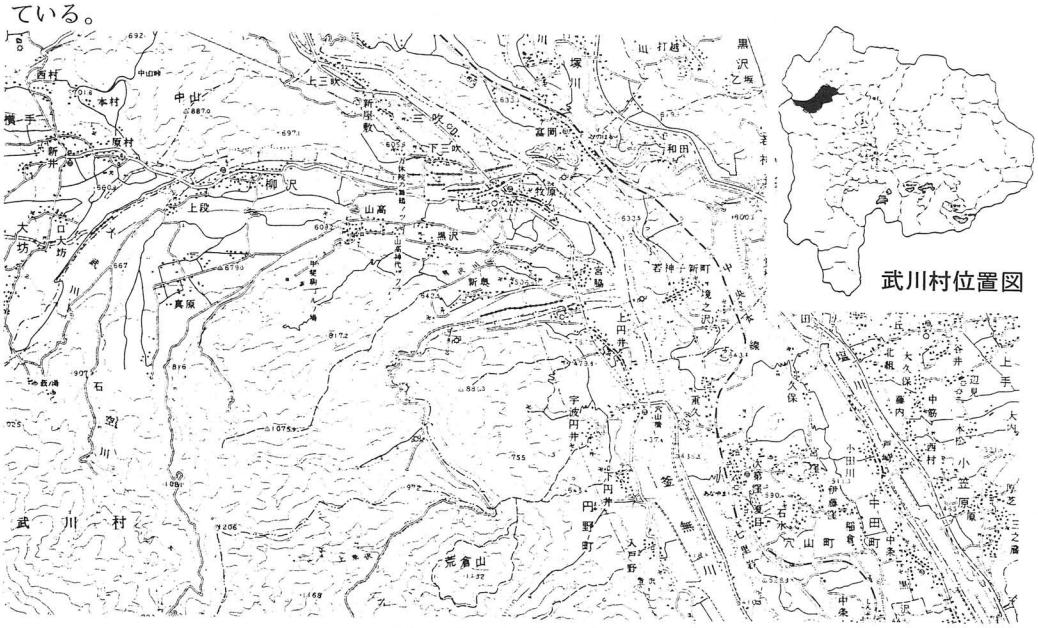
釜無川中流部、同川支流の大武川、小武川、黒沢川、石空川（いしうとろ）など多くの河川が流れる本村は、それらの河川によって形成された河岸段丘や沖積扇状地上に位置し、真原遺跡・向原遺跡等の発掘調査により、縄文時代以降、集落が営まれてきたことが明らかである。

律令体制下において、本村域は甲斐国巨麻郡に属し、『和名抄』に見える“真衣郷”の地だといわれている。郷名の“真衣”は“牧”を意味し、７～８世紀における甲斐国の代表的な牧場地帯であったと思われる。その後真衣牧は官牧となり、『延喜式』によれば、“柏前御牧”と合わせ、毎年30疋の馬を献じていたという。なお、県営圃場整備事業に伴い、平安時代の集落址「宮間田遺跡」の発掘調査が、昭和60・61年度にかけて行われたが、その成果によれば、宮間田遺跡が牧の経営に深く関与した人々が住んだ集落であることが推定される。

律令体制の崩壊、荘園制への移行により、甲斐国においても武士、特に甲斐源氏が強大な勢力を持つに至った。平忠常の乱追討の命をうけた源頼信は、乱を平定し、頼信の子頼義・孫義光は共に甲斐守となった。義光の子義清は官牧を支配し、以後武田一門は清光・信義・信長・時信と栄えていった。一条源八時信は多くの子を武川筋に封じ、そこから山高・白須・教来石（きょうらいし）・牧原・青木などの諸士がおこり、彼らが武川衆の祖となったといわれている。その後青木氏からは、折井・柳沢・横手・山寺・入戸野（にっとの）の各氏が、山高氏からは溝口氏が分派している。その後武川衆は、津金衆・御岳衆・九一色衆などと同様、武田家直属の家臣団として辺境の防備などにあたり、戦時においても幾多の戦功を挙げている。なお武田氏滅亡後、彼らは徳川家康に臣従を誓い、家康の関東移封とともに、多くは武川鉢形領・相模・下総などに封をうけた。

下って江戸時代の本村の状況については、『甲斐国志』に各村ごとの石高、人口等の記述があり、また各村ごとの具体的な生活については『村明細帳』等により推測することができる。それらによれば、各村とも稲・稗・粟・野菜等、田畑の耕作で主に生計を立てていたと思われるが、いずれにしても本村は、江戸時代を通じ、大部分が徳川氏の直轄領であり、複雑な支配制度の中で、そこに居住する農民は、不順な天候や水害などと戦いながら生活していたといえる。

近代に入り、明治４年（1871）甲斐国は山梨県と改称され、同７年（1874）駒城村（柳沢村ほか２ケ村）、同８年（1875）新富村（山高・黒沢・三吹の３ケ村）、武里村（新奥・宮脇・牧原の３ケ村）が誕生し、同11年（1878）各村は北巨摩郡に属した。その後 昭和８年(1933) 新富村・武里村が合併して武川村となり、同30年（1955）駒城村の一部を編入して現在に至っている。



第１図　武川村全体図

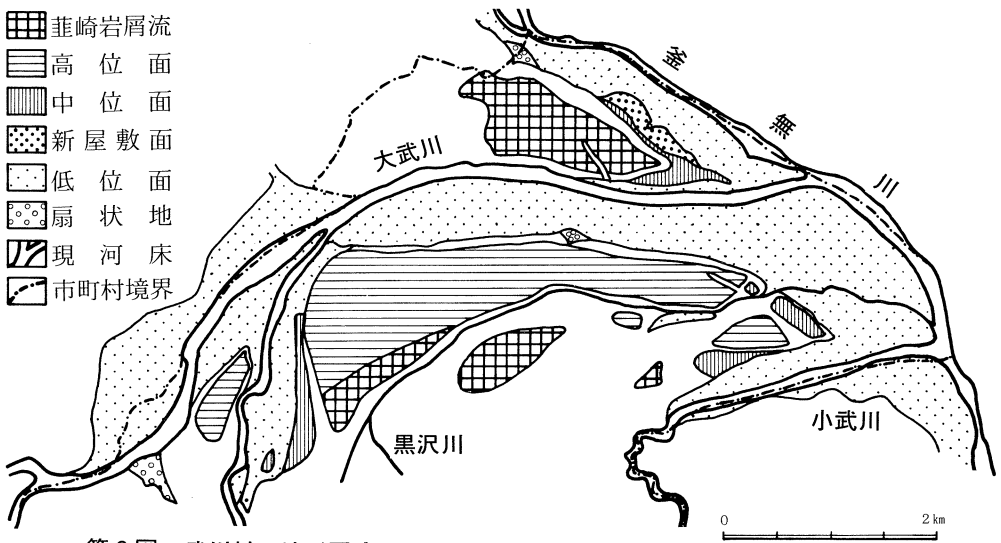
第３章　武川村の地形・地質

武川村は、中央を南北に走る糸魚川―静岡構造線を境に赤石山地とフォッサマグナ中部地域とにまたがって位置する。従って武川村の大部分は山地によって占められる。糸魚川―静岡構造線より西側には第三紀中新世の花崗閃緑岩から構成される甲斐駒ケ岳岩体が、主として堆積岩からなる四万十帯に貫入して広く分布する。甲斐駒ケ岳岩体に接する周辺の堆積岩は熱変成作用を被りホルンフェルスとなっている。糸魚川―静岡構造線の東側では、甘利山の北方延長線の山地および中山にかけて火山噴出岩類からなる櫛形山層、および砂岩・泥岩からなる桃の木層などの海成第三系が分布している。

また北には第四紀に形成された八ケ岳火山が広い山麓斜面を伴ってそびえている。八ケ岳の大規模な山体崩壊にともなう岩なだれ（韮崎岩屑流）が中期更新世に生じ、釜無川の左岸に比高100ｍをこえる急崖を形成して厚く広範囲に分布している。武川村における韮崎岩屑流は、中山の東側山麓、および甲斐駒ゴルフ場付近に分布している。浅川（1985MS）によると甲斐駒ゴルフ場など甘利山地側に分布する韮崎岩屑流の高度は対岸の台地面より60～100ｍ高く、甘利山地の山麓に発達する他の地形の断層変位などからこの地域の変位速度は1000年あたり0.08～0.6ｍであることが推定されている。（吉村・平川、1986）

武川村を構成している集落は、村の北部を流れる釜無川・大武川・小武川などの河川沿いに形成された谷底平野及び台地などの平坦地に集中している。本地域の平坦面をここでは大きく、３区分し、高位面・中位面・低位面とする。

高位面は、真原から山高・黒沢などの集落がある大武川右岸に広く分布する。この面は、西



第２図　武川村の地形区分

側の真原付近では北傾斜であるが、これに連続する山高から黒沢にかけては東傾斜を示す。また、黒沢川と小武川とにはさまれた新奥集落よりも上位にも高位面が分布する。これらの高位段丘を構成する礫層は花崗岩類・ホルンフェルスなどの礫からなり、その上位には御岳第1軽石（Ｐｍ－Ｉ）以上の風化火山灰層が堆積している。万休院の面は韮崎岩屑流の堆積面としてとらえられる。

中位面は、下三吹の集落の面、新奥集落の面、および新奥の寺院（宝前院）より東方で南傾斜の段丘面などから構成される。中位面の構成層は礫層からなりその上位に薄い風化火山灰層をのせている。

低位面は釜無川・大武川・小武川によって形成された谷底平野からなる沖積面である。大武川の右岸には、上段・柳沢・山高・牧原などの集落がこの面上にのる。小武川と黒沢川とにはさまれた低位面に宮脇集落が存在する。釜無川の右岸の低位面には上三吹の集落がのる。上三吹の面よりやや高い低位面が新屋敷集落の東側に南北方向に広がり、新屋敷面と呼ばれており（藤本、1988）、この面の崖線沿いの東側には釜無川の旧河道が南北にみられる。（吉村・平川、1986）平安時代の集落遺跡である宮間田遺跡は新屋敷面上に存在する。

第4章　遺跡の分布と概要

今回の遺跡詳細分布調査において明らかにされた遺跡群の分布状況を、武川村内の地形的な立地環境から概観してみたい。

前章において概観したように、武川村内の集落はその大半が釜無川・大武川・小武川などの河川沿いに形成された河岸段丘面に集中し、高位面・中位面・低位面の各平坦面に3区分しえた。武川村内の遺跡もこれらの平坦面に集中し、また各平坦面に存在する遺跡の時期が大きく異なる傾向を示している。

高位面とされる大武川右岸の真原から山高・黒沢地区では広大な平坦面を利用して縄文時代および中・近世の遺跡が多く存在する。この地域は、「武川村の地形・地質」で明らかにしたように西側の真原付近では北傾斜をなし、これに連続する山高から黒沢にかけては東傾斜の緩傾斜をなす。真原地区の北斜面では真原Ｍ遺跡でわずかに弥生土器の散布が認められるものの、他はほとんどが縄文時代の中期を中心とする遺跡群が分布する。この地区の北側段丘上には現在山林が広がっており、遺跡の分布は把握できないが、真原付近の遺跡群がさらにこの北側地区に拡がる可能性がある。

山高・黒沢地区では縄文時代の遺跡16ケ所、中・近世の遺跡17ケ所が分布するが、縄文期の遺跡群は段丘南側、中・近世の遺跡は段丘北側に偏る傾向が認められる。縄文時代のものでは、実原Ｂ遺跡で草創期の有舌尖頭器1点が発見され、今回の調査で発見された遺物のなかでは最古のものとして注目される。縄文時代中期の遺物は、東原Ａ遺跡、実原Ａ・Ｂ遺跡等で広

範囲にわたって濃密な分布が認められ、この時期の集落がいくつか存在するものと判断される。弥生時代以降平安時代の所産と考えられる遺物も数遺跡において発見されているが、分布状況は極めてうすく、遺跡群が移行した時期と考えられる。続く中・近世になると遺跡は増加現象を示し、現代の集落の基礎となる集落がこの時期以降形成されてきたと考えられる。付近は、徳川家奉行伊奈忠次知行書立写の山高郷・黒沢郷が置かれた地域に比定され、遺跡立地からも各郷の所在地域を裏付けることができよう。また、山高実相寺付近に、山高氏の屋敷跡が存在したとされているが、遺構はわずかに残る土塁以外に推定する資料がない。

黒沢川と小武川に挟まれた現在の新奥集落のうえにある高位面では、縄文時代の遺跡が2ケ所、平安時代の遺跡1ケ所が確認された。

大武川左岸の三吹地区では、中山からなだらかに降る東傾斜面に縄文時代の遺跡1ケ所、奈良～平安時代の遺跡3ケ所のほか中・近世の遺跡9ケ所が確認された。この地区の東には武川衆の馬場民部右衛門尉信成が開基とされる曹洞宗万休院が存在している。

中位面では、3ケ所の遺跡が確認された。新奥大持原の高位面から降った宮脇上原地区では2ケ所の遺跡が確認され、ともに縄文時代、平安時代、中世の遺物が散布している。三吹地区の高位面から下三吹地区へ半島状に突き出した尾崎地区には中・近世の遺物が散布している尾崎遺跡が存在する。以上の様に縄文時代の遺物は3ケ所から、平安時代の遺物、中・近面の遺物がそれぞれ2ケ所から発見されている。この中位面では3ケ所の遺跡しか確認できなかったが、これは中位面がもともと他の面に比べ面積が挟小であることと共に宅地化の進んでいる地域であることに因ろう。

低位面には14ケ所の遺跡が分布している。縄文時代の遺物が発見された遺跡が5ケ所、平安時代の遺物が発見された遺跡が3ケ所である。中・近世の遺物は9ケ所の遺跡から発見されたが、今回弥生時代・古墳時代の遺物は全く発見できなかった。また牧原東原B遺跡は従来の台帳では遺跡として認識されていたが、今回の調査では遺物等は採集しえず内容も不明である。この低位面は中・近世に遺跡が激増する地域であるが、さらに検討すると「武川村の地形・地質」でもふれている「新屋敷」面と他地区とではその遺跡の在り方に大きな差異が存在する。

新屋敷面は新屋敷集落の東側に存在する、上三吹の低位面に比べやや高い面で北東から南西へ細長く続いている。この面の東側には釜無川の旧河道がこの面に沿うように見られる。また平安時代初頭の牧監跡とも想定されている宮間田遺跡ののっている面でもある。ここでは宮間田遺跡を含めて3ケ所の遺跡が確認された。うち2ケ所からは縄文時代、中・近世の遺物が発見され、平安時代の遺物は3ケ所すべてに認められた。この面で確認された遺跡は広範囲に遺物が散布しているもので、宮間田遺跡をも合わせて新屋敷面全面に遺跡が拡がる可能性も否定しえない。前述したように、この新屋敷面を西へ昇った三吹の高位面からは奈良～平安時代の遺跡、中・近世の遺跡が発見されている。村内他地域に奈良～平安時代の遺跡が少ないことと比較し

ても釜無川と大武川に挟まれたこの地区の歴史的特徴とも言え、宮間田遺跡をも含む当該地域の遺跡の性格を考える上でも興味ある在り方である。

新屋敷面を除く他の低位面では11ケ所の遺跡分布が確認された。縄文時代の遺跡が上三吹、牧原、新奥と3ケ所に散在しているが、他の7ケ所はすべて中・近世の遺物が散布しており、該期以降この地域における遺跡の急増が窺える。これらの中・近世の遺跡は釜無川右岸の大武川と山高・真原の高位面に囲まれた、牧原～山高下～柳沢地区へと延びる細長い地域に集中している。この地区は現在でも集落が連続して存在している地域であり、高位面における中・近世の遺跡と同様現在の集落の基礎がこの時期に形成されたものと言えよう。三吹地区の低位面からは中・近世の遺跡は発見出来なかった。これは釜無川の旧河道であったため遺跡が営まれなかったためとも、釜無川による堆積のためとも判然としえない。

この低位面においては、市街地化、圃場整備の進展などのため今回の調査で確認された以外にも多くの遺跡が存在した事が推察される。

最後に武川村全体に於ける遺跡分布の特徴を概観しておきたい。時代的には、縄文時代、中・近世の遺跡が多く、奈良・平安時代の遺跡は少数であった。また、弥生時代・古墳時代の遺物は僅か数遺跡で確認されたにすぎない。地形的には、高位面に縄文時代、中・近世の遺跡が多く認められ、低位面では中・近世の遺跡が主体となる傾向にある。中位面及び新屋敷面では縄文時代、平安時代、さらに中・近世の遺跡が混在するが、新屋敷面では特に平安時代の遺跡が中心として把握しえよう。すなわち時代が降るに従い遺跡も高位面から低位面へ移行するが、中・近世になると村全域へ拡散する。地区的には、大武川・小武川に挟まれた真原から山高へ延びる広大な高位面上では縄文時代、平安時代の遺跡が多く存在し、三吹地区では高位面から新屋敷面にかけて平安時代から中・近世の遺跡が集中する。特に新屋敷面にのる宮間田遺跡はその内容がよく把握された県内でも有数の遺跡であり、その周辺に存在する同時期の遺跡群もそれとの関連で注目されると同時に宮間田遺跡の性格をさらに検討する上でも興味ある在り方である。中・近世の遺跡は高・中・低の各面において、現在の集落に重なるように分布しており、現在の集落の基礎が形成された時期であると言えよう。

第1表　遺　跡　地　名　表

No.	遺　跡　名	種　別	所　在　地	時　期	備　考
1	真原A遺跡	散布地	山高字真原3567—35　他	縄文	1982年　調　査 武川村教育委員会
2	真原B遺跡	集落址	山高字真原3567—41　他	縄文中期	
3	真原C遺跡	散布地	山高字真原3567— 8　他	縄文中期	
4	真原D遺跡	散布地	山高字真原3567—14　他	縄文中期	
5	真原E遺跡	散布地	山高字真原3567—19　他	縄文中期	
6	真原F遺跡	散布地	山高字真原3567—54　他	縄文	
7	真原G遺跡	散布地	山高字真原3567—117他	縄文	
8	真原H遺跡	散布地	山高字真原3567— 99　他	縄文	
9	真原Ⅰ遺跡	散布地	山高字真原3567—85　他	縄文	
10	真原J遺跡	散布地	山高字真原3567—86　他	平安	
11	萩坂日影遺跡	散布地	山高字真原萩坂日影 3138— 2他	縄文	
12	真原K遺跡	散布地	山高字真原3567—72　他	縄文	
13	真原L遺跡	散布地	山高字真原3567—69　他	縄文	
14	真原M遺跡	散布地	山高字真原3567—68　他	弥生	
15	下原A遺跡	散布地	柳沢字下原2852　　他	縄文	
16	下原B遺跡	散布地	柳沢字下原2658　他	縄文・弥生・中世	
17	寺久保A遺跡	散布地	山高字寺久保2488　他	縄文中期・中世	
18	寺久保B遺跡	散布地	山高字寺久保2495　他	近世	
19	神林遺跡	散布地	山高字神林3043—31他	縄文・中世	
20	西ノ宮A遺跡	散布地	山高字西ノ宮3043—12他	縄文・中世	
21	西ノ宮B遺跡	散布地	山高字西ノ宮3014— 5他	縄文・中世	
22	西ノ宮C遺跡	散布地	山高字西ノ宮3028　　他	中世	
23	西ノ宮D遺跡	散布地	山高字西ノ宮2988— 2他	縄文・中世	
24	北小路A遺跡	散布地	黒沢字北小路1688— 1他	縄文中期・中世	
25	実原A遺跡	散布地	黒沢字実原1378　　他	縄文 中期	旧カード833
26	北小路C遺跡	散布地	黒沢字北小路1650　他	縄文中期	
27	北小路B遺跡	散布地	黒沢字北小路1677　他	縄文 ・中世	
28	山高A遺跡	散布地	山高字北小路2771　他	中・近世	
29	山高B遺跡	散布地	山高字北小路2742　他	縄文中期・中世	
30	山高C遺跡	散布地	山高字北小路2749　他	中・近世	
31	大小路遺跡	散布地	山高字大小路2593　他	縄文	
32	東原A遺跡	散布地	山高字東原2828　　他	縄文・中世	
33	東原B遺跡	散布地	山高字東原2803　　他	縄文	
34	実原B遺跡	散布地	黒沢字実原1409　　他	縄文草創期　中期・奈良・平安・近世	

No.	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
35	小路A遺跡	散布地	黒沢字小路1496	中・近世	
36	黒沢遺跡	散布地	黒沢字下原1716 他	縄文・中世	
37	小路B遺跡	散布地	黒沢字小路1522 他	近世	
38	中河原遺跡	散布地	新奥字中河原900 他	縄文	
39	大持原A遺跡	散布地	新奥字大持原2217 他	縄文	旧カード832
40	上原A遺跡	散布地	宮脇字上原 2102 他	縄文・平安・中世	旧カードあり
41	上原B遺跡	散布地	宮脇字上原2034 他	縄文・平安・中世・近世	旧カードあり
42	大持原B遺跡	散布地	新奥字大持原 2208 他	平安・中世	
43	ママ下遺跡	散布地	牧原字ママ下2391 他	中・近世	
44	牧原東原A遺跡	散布地	牧原字東原2060 他	中・近世	
45	北原遺跡	散布地	牧原字仏堂寺1267 他	縄文	
46	堂仏寺遺跡	散布地	牧原堂仏寺1267 他	中・近世	
47	西原A遺跡	散布地	牧原字西原960 他	中世	
48	西原B遺跡	散布地	牧原字西原904 他	中・近世	
49	西原C遺跡	散布地	牧原字西原804 他	中・近世	
50	下田中遺跡	散布地	牧原字下田中701 他	中・近世	
51	下町遺跡	散布地	柳沢字下町710 他	中世	
52	中村遺跡	散布地	柳沢字中村1579－2 他	中世	
53	山田A遺跡	散布地	三吹字山田3467－1 他	近代	
54	山田B遺跡	散布地	三吹字山田 3501 他	中・近世	
55	西久保A遺跡	散布地	三吹字西久保3118 他	中・近世	
56	坂上A遺跡	散布地	三吹字坂上3893 他	中・近世	
57	坂上B遺跡	散布地	三吹字坂上3863 他	縄文・中・近世	
58	坂上C遺跡	散布地	三吹字坂上3721 他	中・近世	
59	西久保B遺跡	散布地	三吹字西久保3291 他	奈良・平安・中・近世	
60	西久保C遺跡	散布地	三吹字西久保3280 他	平安・中・近世	
61	坂上D遺跡	散布地	三吹字坂上3869 他	中世	
62	西久保D遺跡	散布地	三吹字西久保3207 他	奈良・中・近世	
63	新左ェ門原遺跡	散布地	三吹字新左ェ門原 3569－2他	弥生・中・近世	
64	山田C遺跡	散布地	三吹字山田3416 他	中・近世	
65	尾崎A遺跡	散布地	三吹字尾崎2477 他	中・近世	
66	御崎A遺跡	散布地	三吹字御崎1262 他	縄文・平安・近世	
67	御崎B遺跡	散布地	三吹字御崎1151 他	縄文・平安・近世	
68	富貴野遺跡	散布地	三吹字富貴野 283 他	縄文	
69	星山古城遺跡	城館址	第27林班ち－5 他	戦国	
70	鴨尾遺跡	散布地	柳沢字鴨尾 3268 他	縄文	1962年分布調査

No.	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
71	牧原東原B遺跡	散布地	牧原字東原2286　他	縄文	1972年分布調査
72	中山砦	城館址	三吹字中山3037　他	戦国	1980～81年調査 武川村誌編纂室
73	向原遺跡	集落址	黒沢字向原1776　他	縄文前中後期・弥生・平安	1984年　調査 武川村教育委員会
74	宮間田遺跡	集落址	三吹字宮間田1337　他	平安	1985～86年　調査 武川村教育委員会
75	尾崎B遺跡	散布地	三吹字前尾崎2361－1　他	平安	調査後確認

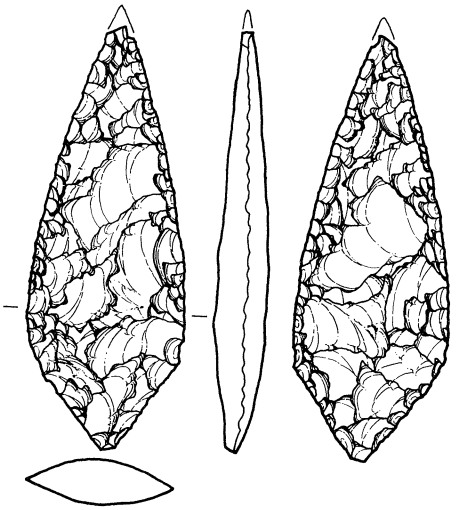
古文書等にみられる遺称・屋敷

No.	名称	所在地	出典	備考
1	餓鬼喉（がきののど）	柳沢山中	『甲斐国志』古跡部	
2	柳沢氏屋敷	柳沢	『甲斐国志』古跡部	
3	牧原氏屋敷	牧原	『甲斐国志』士庶部	
4	山高氏屋敷	山高	『甲斐国志』士庶部	土塁がわずかに残存
5	蔦木氏屋敷	牧原	『甲斐国志』士庶部	

第5章　表　採　遺　物

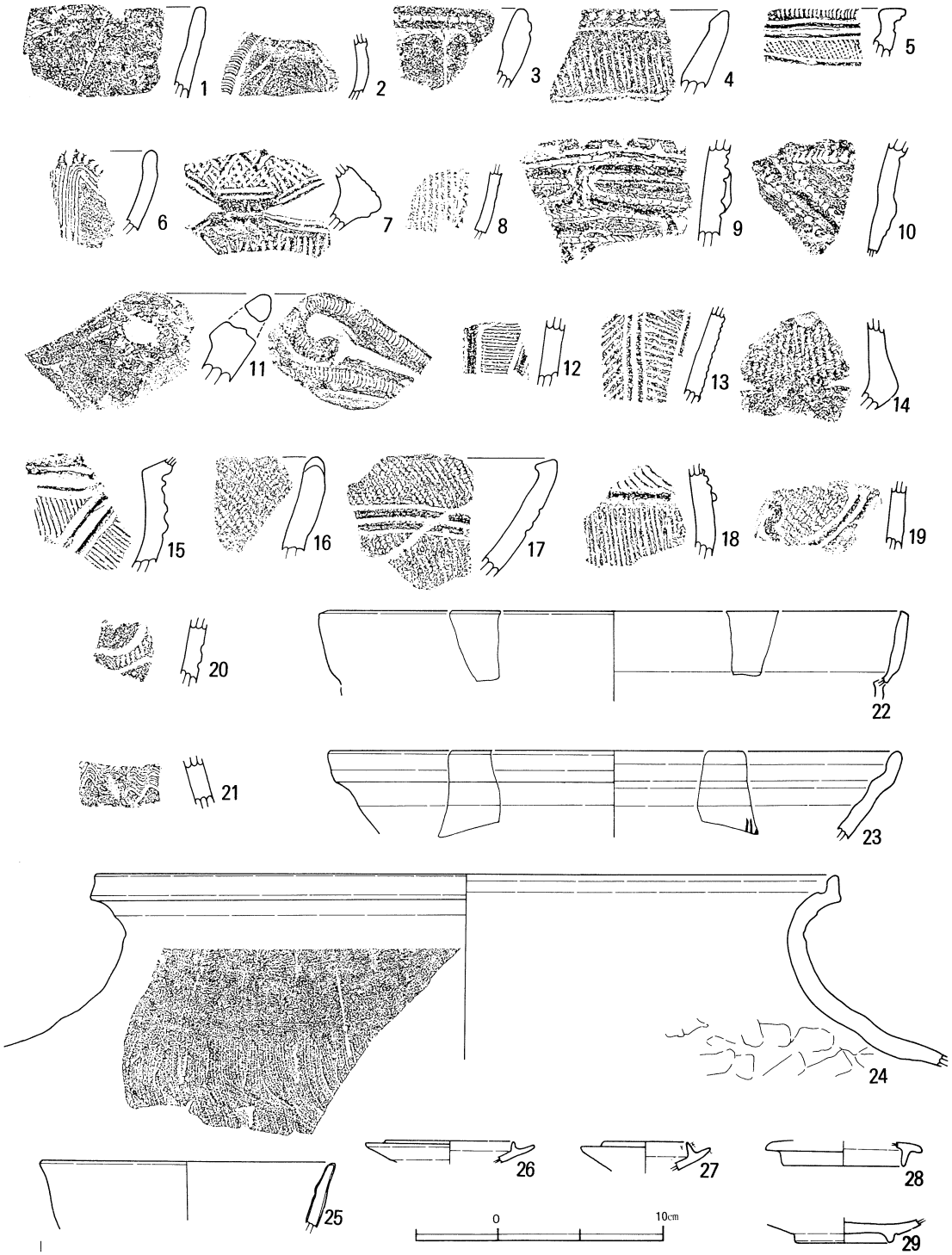
分布調査によって表面採集された土器などの遺物は、およそ蜜柑箱一箱ほどの量になったが、ここで何点が特徴的なものをあげてみよう。

第3図は、緑灰色チャート製の有舌尖頭器である。左右非対象で、左縁にカエリがないが、基部は作り分けられている。縄文草創期と思われる。



第3図　実原B遺跡有舌尖頭器（1／1）

第4図1は尖底をなす深鉢形土器の口縁部破片。胎土中に繊維を含む。縄文時代前期初頭。2は隆帯に半截竹管文による刺突が連続して施されるもの。縄文時代前期後半。3～8は縄文時代中期初頭の土器片。3は三叉状文と沈線が組み合わされ、細い棒状工具による結節沈線がめぐる。4は口縁部に刻目がめぐり、平行する沈線の間を条線によって充填している。5は口縁部外側にみみずばれ状の連続刺突文による突帯がめぐり、以下を半截竹管による沈線がめぐるもので、空間部に斜位の条線とそれが作り出す隆帯上に刻目を施した文様が見られる。6は半截竹管を使用し、口縁部に刺突をめぐらし、器面は沈線によって文様を描いている。7は半截竹管による沈線によって文様を描いている。8は比較的細い半截竹管による条線が施されている。9は刺突による連続波状文と突帯による横位の区画をつくりその内側に連続刺突文を施す深鉢形土器の胴部破片。縄文時代中期前半。10は突帯と連続刺突により三角形状の横帯文をもつ。縄文時代中期前半。11～14は縄文時代中期中葉の土器片。11は内面に爪形文の施される深鉢形土器の口縁部破片。12は条線の施される面を沈線と隆線により区画している。13は条線と半截竹管による区画文のもの。14は底から若干上位が稜をもって膨らむ特徴的な形態のもの。15～19は縄文時代中期後半の土器片。15は突帯と条線による文様構成のもの。16は縄文の施される深鉢形土器の口縁部。17は沈線と縄文が施されるもの。18は条線を地文とし粘土紐を貼り付ける手法のもの。19は縄文を地文とし突帯文と蛇行する粘土紐を組み合わせる文様のもの。20は比較的太い沈線により曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施される。縄文時代後期初頭。21は櫛描による波状文が施される甕形土器の破片。弥生時代後期後半。22は内耳土器の口縁部破片資料。中世。23は瀬戸・美濃系の擂鉢の口縁部破片資料。中世。24は14～15世紀前半に比定される常滑の大甕の破片。外面に刷毛状工具による整形がみられる。25～29は近世の陶器。25は志野焼。26・27は平仄。内面に釉がかけられる。28は蓋。29は碗類の底部破片。内面に釉がかけられる。



第４図　表採遺物

1 ……黒沢遺跡　10・12・14・15・20・24…実原Ａ遺跡　22・23……小路Ａ遺跡
2・6　16……実原Ａ遺跡　13……寺久保Ａ遺跡　25・29……山高Ｃ遺跡
3～5・7・9・11・26…実原Ｂ遺跡　17～19……真原Ａ遺跡　27……御崎Ｂ遺跡
8 ……北小路Ｃ遺跡　21……新左ェ門原遺跡　28……西久保Ｃ遺跡

第6章　村内の主要遺跡

1 宮間田遺跡

宮間田遺跡は、武川村三吹字宮間田1337番地他に所在し、標高513 m前後を測る釜無川右岸の河岸段丘上に立地している。発掘調査は、下三吹地区の県営圃場整備事業に先立つ緊急発掘調査として昭和60年・61年度の両年度にわたって行われ、発掘調査面積は、昭和60年度が約4000 ㎡、昭和61年度が約8050㎡におよんでいる。両年度にわたる発掘調査の結果、竪穴住居址94軒、掘立柱建物址45棟、土壙269基、溝状遺構2条などの遺構が検出され、出土遺物としては、土師器・須恵器（墨書土器・刻書土器も含む）、灰釉陶器、山茶椀、中世陶器などの土器類、また銅製銙帯、鉄製鎌、鉄鏃などの金属製品、砥石などの石製品も出土している。

竪穴住居址（以下、住居址とする）は、検出されている94軒のうち74軒が平安時代（うち3軒は小鍛冶遺構）、2軒が中世に属することが出土遺物から確認されているが、残りの18軒は時期不明である。住居址は遺跡全域にわたって分布しており、住居址どうしの重複関係はあまり認められない。掘立柱建物址は、全体に出土遺物が少なく時期決定が非常に困難であり、住居址群との有機的な関連を把握することも非常に困難であるといえる。その形態については、総柱式のものと側柱式のものがあり、側柱式のものが圧倒的に多い。検出された掘立柱建物址のなかで特に注目されるのは、3間×5間総柱式の3面に庇をもつ第45号掘立柱建物址であり、出土遺物はほとんどないが、住居址との重複関係から平安時代に属することが確認されており、その建物址が集落内でどのような役割を占めていたのかが興味深い。宮間田遺跡の住居址群の変遷は、出土土器から大まかではあるがⅠ期（9世紀第3四半期）からⅥ期（13世紀頃）まで認められ、Ⅱ期にあたる9世紀末から住居址の数が急増し、Ⅳ期にあたる10世紀後半まで安定した状態が認められる。それ以降住居址の数も減少し集落の解体へと向うようである。

宮間田遺跡が所在する当該地域は、『和名抄』にみえる巨麻郡のなかの真衣郷が置かれていたとされており、さらに『延喜式』にみえる古代甲斐国に置かれた穂坂・柏前・真衣野の三つの勅旨牧の一つである真衣野牧が置かれていたとする説が、遺称面や地理的・歴史的環境から有力視されている。これらの説を裏付けるかのように本遺跡からは、「牧口」と記された墨書土器が、9世紀末に位置付けられる第78号住居址から出土しており、牧と本遺跡との有機的な関連を示す良好な資料である。また本集落が繁栄した9世紀末から10世紀後半の時期は、文献史料からもわかるように駒牽の期日が比較的守られていたようで、牧経営も安定していたことが窺え、真衣野牧の盛衰が本遺跡の集落の様相に少なからず反映していると思われる。

今後、宮間田遺跡周辺の平安時代集落遺跡の調査例が増加すれば、宮間田遺跡の性格がより浮き彫りにされるとともに、郷内における「村」の在り方や真衣野牧の実態なども明らかになってこよう。今後の発掘調査が期待されるところである。

第5図　宮間田遺跡遺構配置図

2. 中　山　砦

武川筋の中央よりやや北側に位置し、武川村三吹と白州町横手にまたがる中山（標高878 m）の頂上に築かれた中世の山城である。

武川筋の三吹・台ケ原・白須・横手・柳沢・山高・牧原などの諸集落の中央に位置するためその名がある。砦は、南に大武川、北に尾白川の両河川に挟まれ、城山と呼ばれる独立峰の山頂に所在し、山麓の下三吹からは比高357 mに及ぶ。

遺構は、山頂に土塁を巡らせた南北二つの郭を設け、山の原地形を巧みに利用した防御で固めている。主郭の南郭の土塁は西側で高さ約１m、南で1.5 m、東側では高さをしだいに減じ中ばで消失する。南郭内部はほぼ平坦で12m×20mほどの広さをもつ。北郭の土塁は西側中央部で若干内側に張り出し、この部分で約１mの高さを測る。北側は幅もせばまり高さも0.4～0.5 mと低くなり、東側では南部で約２mほど完全に土塁の切れた部分が存在し主郭部の虎口となっている。北郭の広さは、東西10m×南北33mを測る。南郭との間を区切る土塁もほぼ中央付近で低くなり、両方の郭の通路となっている。南郭の南には一段下がった所に幅５m×長さ20mほどの腰郭が設けられ、さらに一段下がった所に三日月形に掘られた空堀状の遺構がある。また、東側斜面には２～３段の帯郭が設けられ、虎口までの進入路を複雑にしている。北東に延びる尾根には竪堀、北西に延びる尾根には尾根切り、南東に延びる尾根には空堀が設けられて防御が固められている。

第６図　中山砦測量図

昭和56年に武川村誌編纂事業に伴い発掘、測量調査が実施された。この調査によって土塁の構築が２時期にわたっていることが判明し、柱穴や礎石状の平石も検出されたほか、土師質土器が出土した。

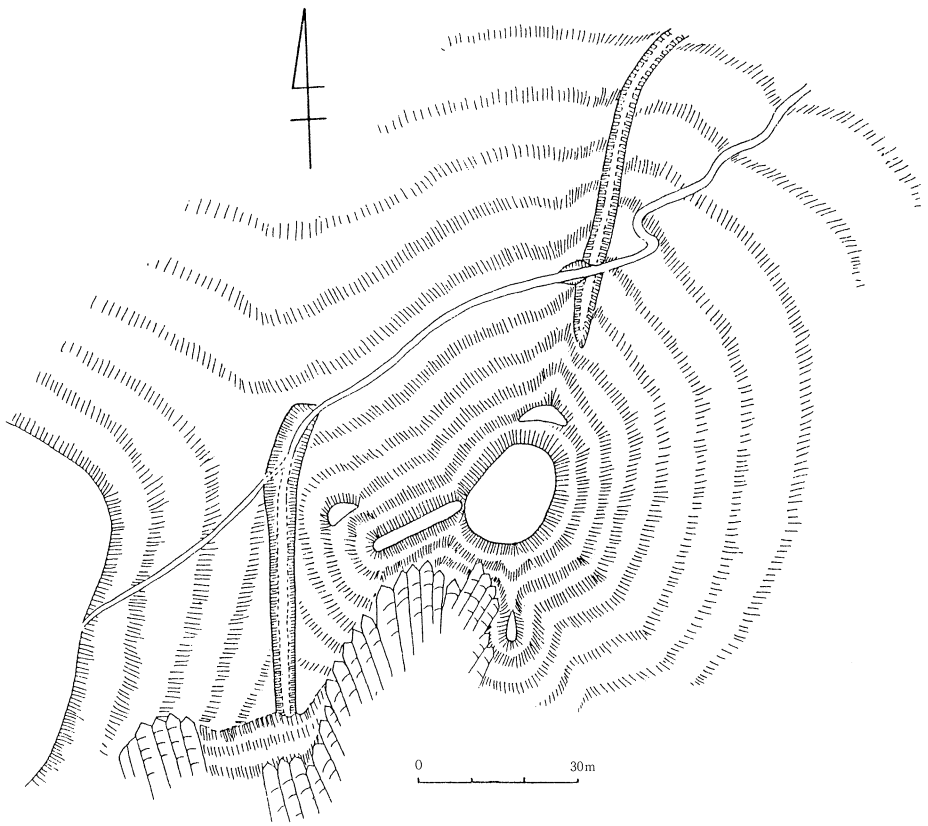
本砦は武川衆の拠点の一つとして、他の城館とともに警固されてきたものである。発掘調査の結果とともに、眺望にすぐれ交通の要衝に位置すること、『甲斐国古城跡志』の「遠見」「ノロシ場所」の記述などから、烽火台としての性格をもつ山城であることが明らかにされている。

3. 星 山 古 城

燕頭山（標高2104．5 m）の北側山裾で、石空川が山間を出るところの右岸に位置する。現地は標高969 mの独立峰で、柳沢の集落からの距離は2 kmほどである。

山頂部が主郭で、南北18m、東西15mほどの削平地である。主郭の南西には尾根を削平し、長さ15m、幅1.5 mほどの細長い郭が配され、これ以外にも主郭の周囲下方には小郭がいくつか見られる。主郭を中心とする郭群の西側には長さ約50mの尾根切りがみられ、そのさらに南西には広大な平地がひろがる。主郭の北側にのびる尾根の東側には上幅5 m、深さ1.5 mほどの竪堀がみられ、50m以上も下方へ続いている。

『甲斐国志』の「星山古墟」の項には「城沢ト云ニ在リ何人墟ナルヲ不知」とあり、築城主体については明確にしていないが、立地、規模からみて武川衆の一族、柳沢氏の山城と考えられる。柳沢の集落の背後にそびえる中山砦をその周辺の地域の要害と考えると、星山古城はまた異なった性格を持つものと思われるが、その性格をめぐっては、南西側に位置する広大な平地を考慮する必要があるであろう。また『国志』にみえる「亭候一所アリ」とは主郭部であろうと思われる。



第7図　星山古城遺構概念図

第7章　ま　と　め

今回の詳細分布調査の結果、74ケ所にのぼる遺跡を発見、確認し多くの成果を得ることができた。詳細は第3章以下で述べたとおりであるが、最後に若干のまとめを行いたい。

文化庁編集の『全国遺跡地図　19　山梨県』ではわずか7ケ所の遺跡が掲載されたのみであったことに比べると10倍以上に増加した。その内訳は、縄文時代―39、弥生時代―3、奈良・平安時代―7、中世―39、戦国時代―2、近世―26、近代―1、不明―1で、最も古い遺物は縄文時代草創期に遡るものも発見されている。

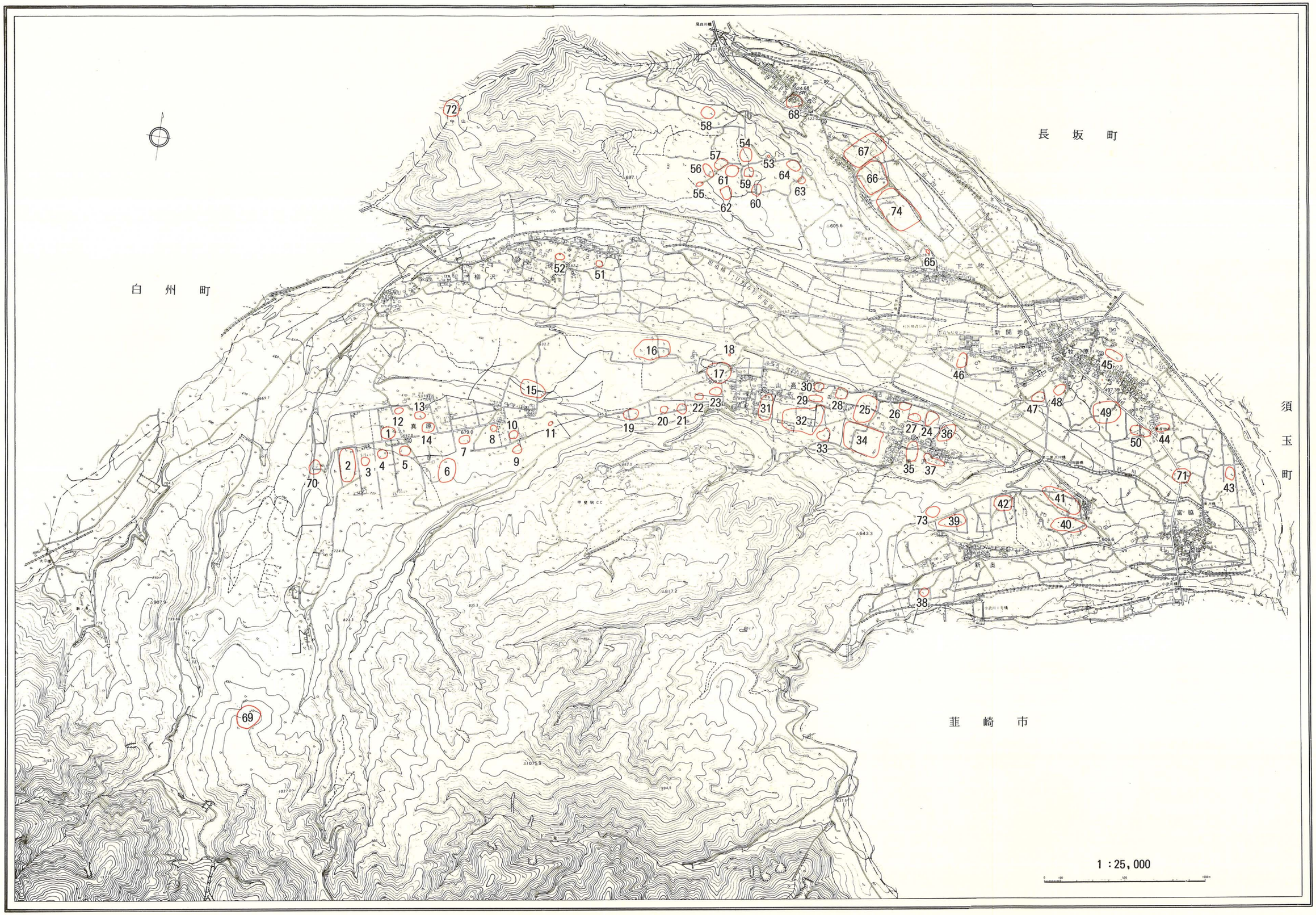
一見してわかるように、縄文時代及び中世・近世の遺跡が大多数を占める。全体的な傾向としては、縄文時代の遺跡は主として高位面に占地している。中世以降になると高位面、低位面両者に拡散・増加し、ほぼ全村にわたって現在の集落と重複して存在しており、この時期以降現在の武川村の集落が形成されてきたといえる。奈良・平安時代の遺跡は7ケ所しか確認できなかったが、宮間田遺跡の占地する新屋敷面とその周囲に集中し、歴史的な課題を示している。

今回は分布調査であったため畑等は遺物の確認をしやすかったが、水田・裸地・林野等にもなお遺跡の存在が予想され、また圃場整備、宅地化などにより既に失われた遺跡も推察される。今後の調査に期待する所以である。

ともあれ、今回の調査の成果が武川村あるいは山梨県に於ける考古学的調査・研究の基礎資料として、また同時に村民の皆さんが地域の文化財に親しみを深め、地域の生活や文化に想いをはせるときのささやかな糧としても役立てば幸いである。最後に、調査に際してご迷惑をおかけした皆様、ご指導を頂いた関係諸氏に心から感謝いたします。

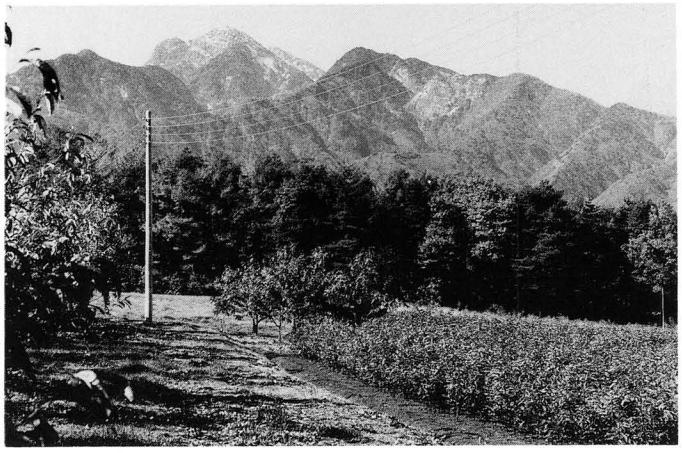
参　考　文　献

1. 佐藤八郎・佐藤森三校訂　大日本地誌大系　45『甲斐国志』1970
2. 文化庁『全国遺跡地図　19　山梨県』1981
3. 山梨県教育委員会『山梨県遺跡地名表』1979
4. 磯貝正義他『角川日本地名大辞典　19　山梨県』1984
5. 山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』1986
6. 武川村教育委員会『宮間田遺跡』1988
7. 武川村誌編纂室『中山砦』1986
8. 武川村誌編纂委員会『武川村誌』上巻　1986
9. 磯貝正義他『日本城郭大系　8　長野・山梨』1980
10. 藤本丑雄「八ケ岳南麓地域」『日本の地質4　中部地方1』1988
11. 吉村稔・平川一臣「地形分類図　土地分類基本調査5万分の1」『韮崎・市野瀬』1986
12. 山梨県教育会北巨摩支会『北巨摩郡誌』1976（復刻）



第 8 図　武川村遺跡分布図

図　　版

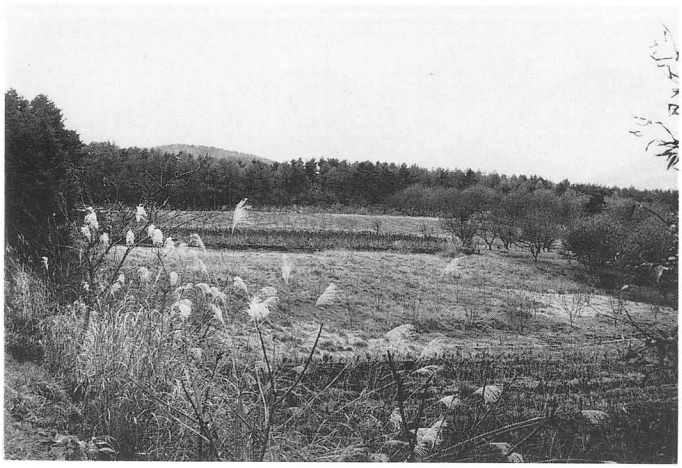


真原Ｂ遺跡（No・２）

真原Ｇ遺跡（No．７）

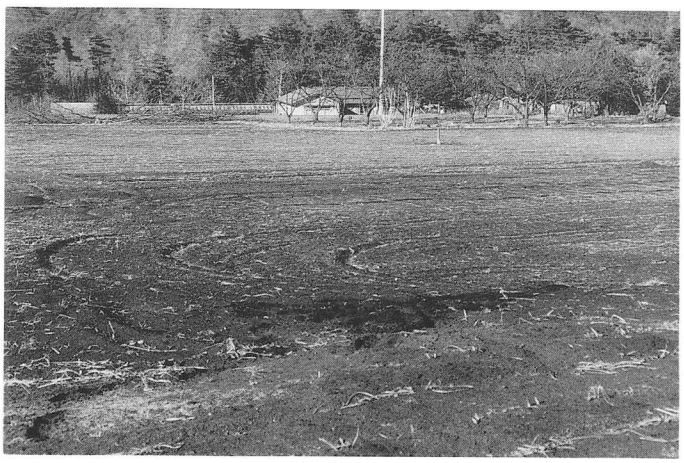
真原Ｈ遺跡（No．８）

図版2



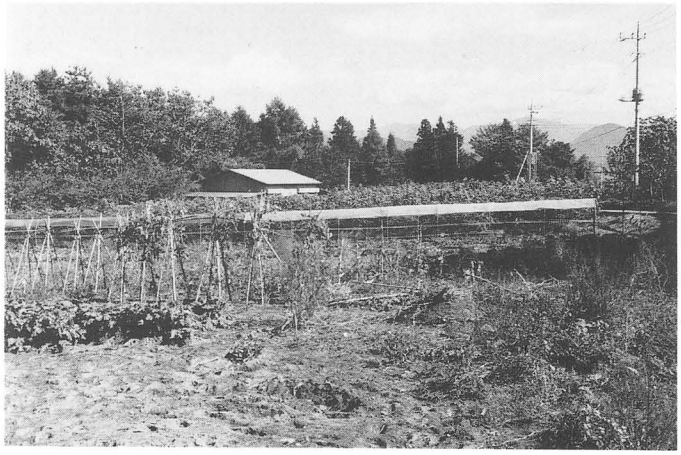
真原Ⅰ遺跡（No. 9）

真原Ｊ遺跡（No. 10）



真原Ｌ遺跡（No. 13）

真原M遺跡（No. 14）



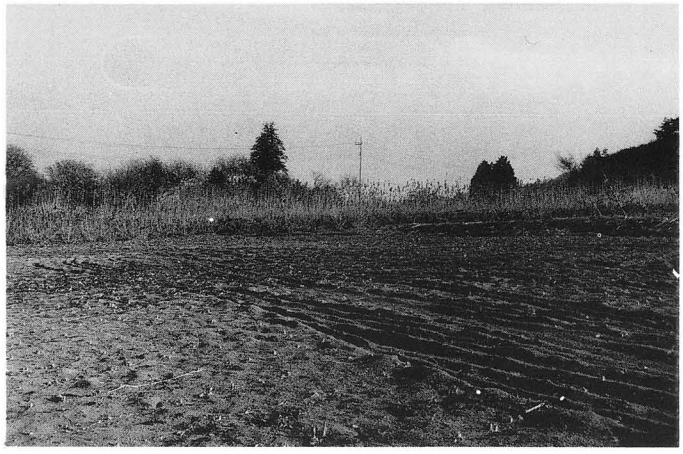
寺久保A遺跡（No. 17）

寺久保B遺跡（No. 18）

図版

4

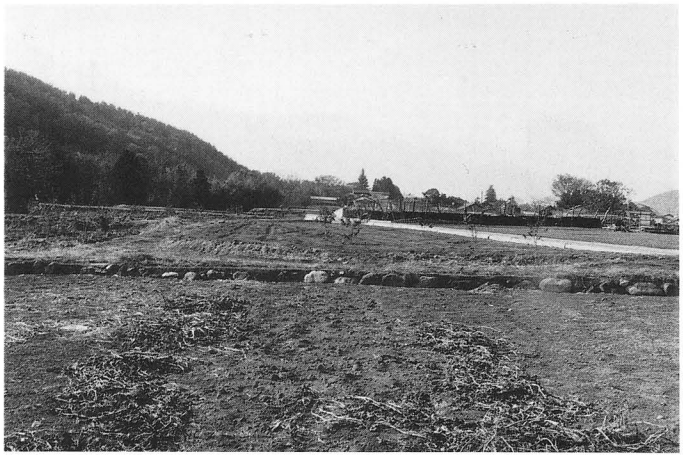
神林遺跡（No. 19）



西ノ宮Ｄ遺跡（No. 23）

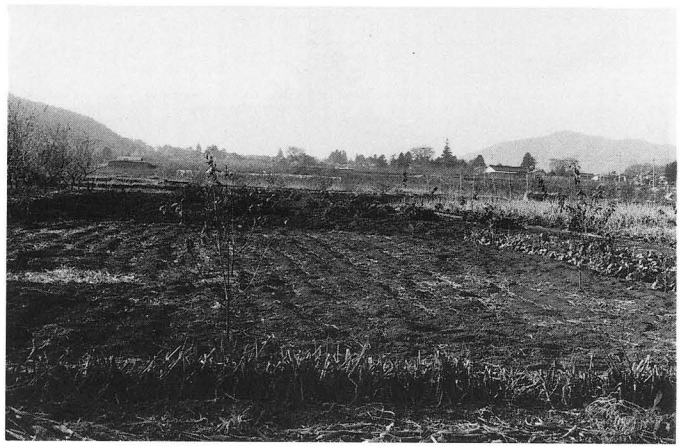
実原Ａ遺跡（No. 25）

山高Ｂ遺跡（No. 29）

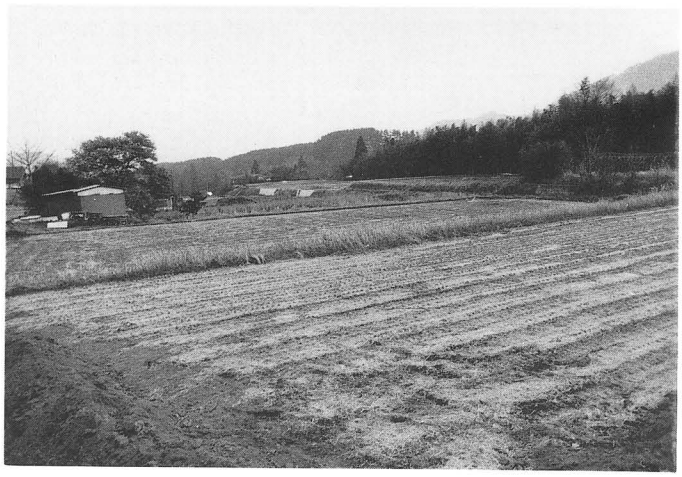


東原Ａ遺跡（No. 32）

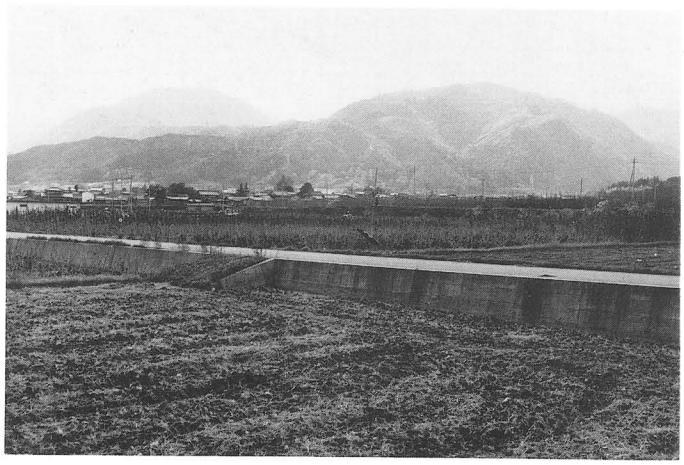
東原Ｂ遺跡（No. 33）



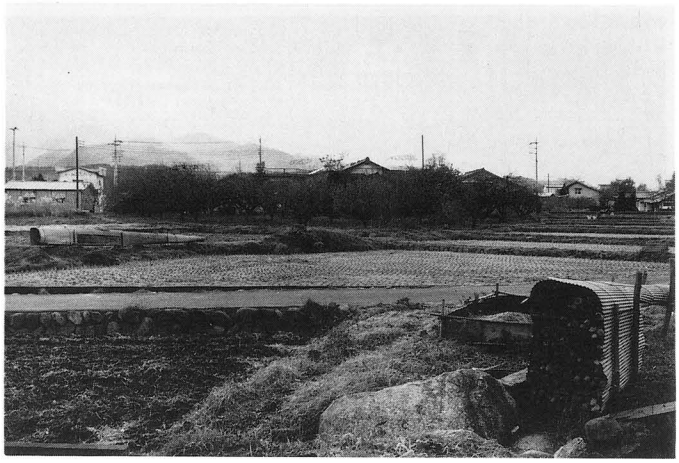
実原Ｂ遺跡（No．34）



小路Ｂ遺跡（No．37）



ママ下遺跡（No．43）

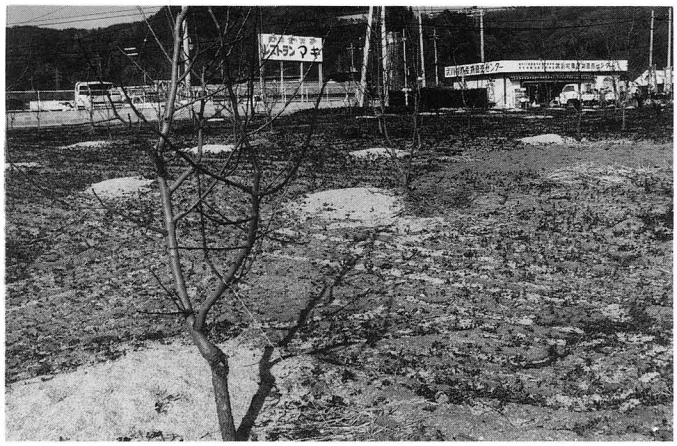


牧原東原Ａ遺跡（No．44）

堂仏寺遺跡（No．46）

西原Ａ遺跡（No．47）

図版8



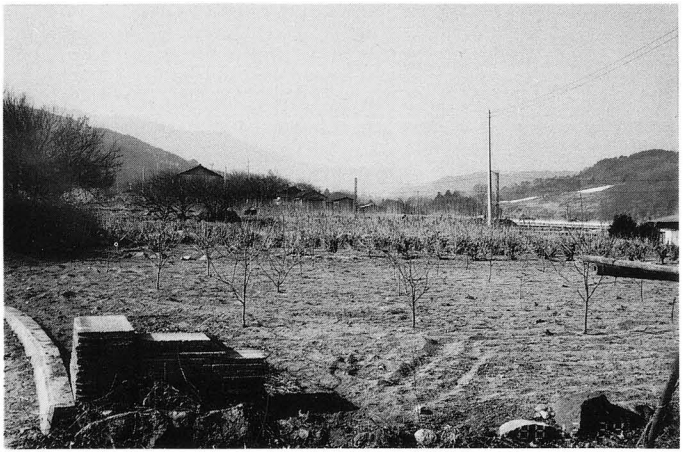
下田中遺跡（No. 50）

山田Ｂ遺跡（No. 54）

坂下Ａ遺跡（No. 56）

尾崎Ａ遺跡（No．65）

御崎Ａ遺跡（No．66）



御崎Ｂ遺跡（No．67）

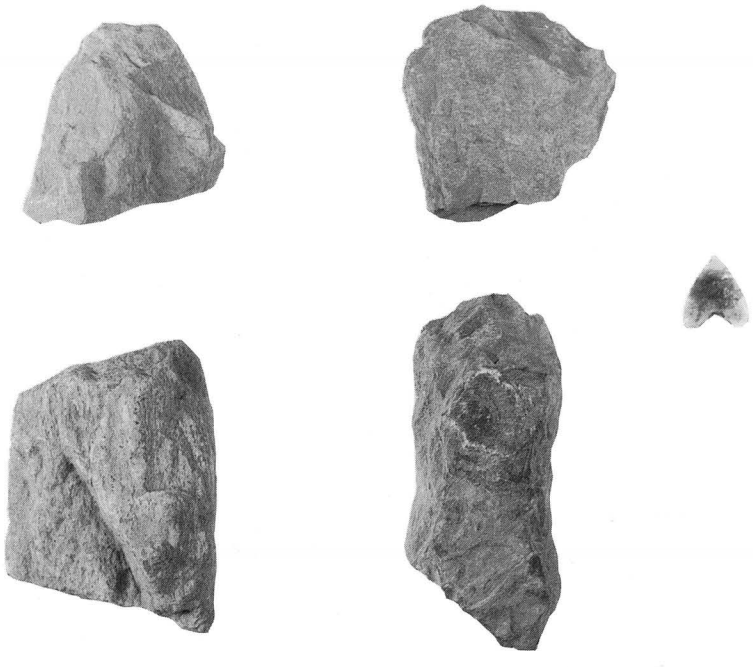
図版10

中山砦遠景（No. 72）

中山砦土塁上部（No. 72）

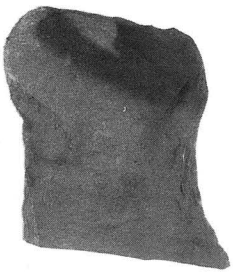
星山古城遠景（No. 69）

真原B遺跡　縄文土器

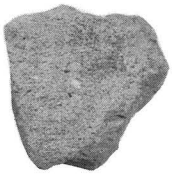


真原G遺跡　打製石斧・石鏃

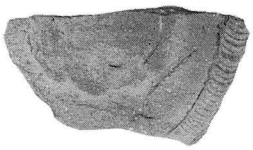
真原Ｃ遺跡　磨製石斧



真原Ｅ遺跡　打製石斧



寺久保Ａ遺跡 縄文土器



実原Ａ遺跡　縄文土器・打製石斧・磨製石斧

大小路遺跡　縄文土器・石器

実原Ｂ遺跡　縄文土器・石器

実原Ｂ遺跡 有舌尖頭器

東原Ａ遺跡 打製石斧・磨石

実原Ａ遺跡　縄文土器

東原Ａ遺跡 常滑甕

遺跡詳細分布調査報告書

平成元年　3月24日　印刷
平成元年　3月31日　発行
発　行　武川村教育委員会
山梨県北巨摩郡武川村三吹2161－1
ＴＥＬ 0551 －26－ 3021

印　刷　峡北印刷株式会社
山梨県北巨摩郡長坂町長坂2313
ＴＥＬ 0551 －32－ 3245